フィールド（現場）からの風 ㉒

宮田守男

人生の節目ごとに抱く想いの大切さを忘れてはいけない

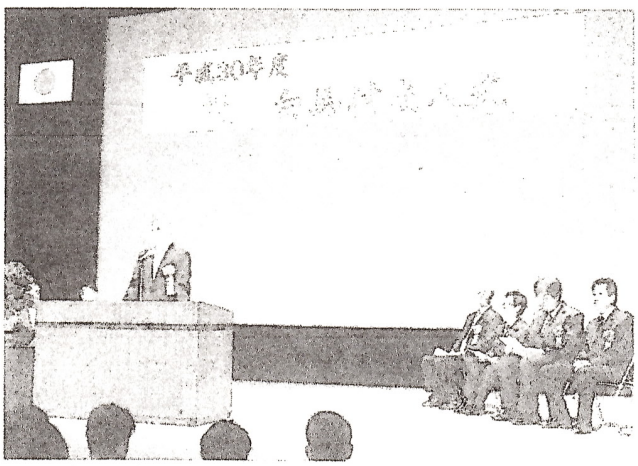
8月中旬挙行された白馬村成人式に参列する機会があった。1998年開催された長野冬季オリンピック・パラリンピックの開催年に生まれ、今年成人を迎えた94名。夏の成人式だが、数名の振り袖姿や素敵なドレス姿の中で、清楚な服装の参加者になぜか初々しさを感じてしまう。開始定刻前から式場に入り、中学卒業から久し振りに合った仲間と懇談する雰囲気は、成人式そのものだ。荒れる雰囲気は、微塵も感じる事が無く、将来の白馬を担う成人者たちの素直に実直に育った姿に、参列者皆が喜びを感じたのだろう。

30分の成人式で、主催者や来賓の短めな心温まる挨拶は、成人者にも内容が心に届いたと信じたい。当時のクラス担任の挨拶も印象的だった。A組の平林隆昭担任教諭は、用意した式辞内容の朗読を止め、「おめでとう。何がおめでたいの？」と成人者に問い掛け、これから大人の仲間入りをして、多くの責任を担う覚悟を再認識させた。B組の山崎正之担任教諭は、20歳を過ぎれば、体力は劣って行くが、心の成長は別だ。大きな一生を掛ける「夢」を抱く事が大切と話す。

日本経済新聞のコラム春秋でポール・ニザン「アデン、アラビア」の有名な書き出し、20歳が人生で最も美しい時とは言わせない。「この世界のなかで自分の場所を知るのはキツイものだ」、「何者でもない自分が社会で何をなせるのか、若い希望は不安と表裏一体だ」と。また19歳で肝臓がんと診断された山下弘子さんの手記「人生の目覚まし時計が鳴ったとき」の中の1節「人生は短くても長くても一度きり。泣いても笑っても一度きり。一瞬たりとも後悔なく生きたい」と紹介した言葉を成人者に贈りたい。

成人者が迎える社会は、多くの課題が待ち構えている。その一つがサマータイムの論議だ。一見聞くと良いのかなと思ってしまうが、2時間時計を早めると、朝食は今の時間で朝5時、昼食は10時、夕食は4時。宿泊観光を基盤とする大北地域の対応が想像できなくなってしまう。朝取り野菜出荷農家は、朝何時から収穫作業をスタートする事になるのだろう。夕方4時に夕食を済ませた観光の皆さんは、8時に床に就いてくれるのだろうかと心配事が絶えない。ぜひ、地域として論議を傍観するのでなく、積極的に地域の実情を発信してほしいと願っている。

（NPO法人信州地域社会フォーラム理事・白馬村森上）



C組の柳田渓太担任教諭、言葉を選びながらの話は、人を育てる現場の実情が伝わってくる。